



全国棚田(千枚田)連絡協議会

# 棚田ライタス

第65号 2013.11.10

(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3チム石塚内

TEL:042-386-8355 /FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

## 特集・災害と農山村コミュニティ



高知県津野町貝ノ川「棚田キャンドルまつり」から、幻想的な棚田夜景

提供：いづれも高知県津野町

高知県津野町の「津野山古式神楽（国重要無形民俗文化財）」の大薺（おおやな）の舞から。千年以上続く伝統行事。大薺が赤子を泣かせ成長を祈願する舞。全部で17の舞があり8時間要する。11月に3つの神社で奉納される。

特集・対談 内山節×千賀裕太郎「災害からみえてくる日本の農村共同体」／記録的豪雨から1年（福岡県うきは市つづり）／災害を乗り越える農山村コミュニティの底力（和歌山県那智勝浦町）／島根県吉賀町（島根県）／特別寄稿・福島県いわき市から ほか



# 特集 .. 災害と農山村コミュニティ

## 内山 節 × 千賀裕太郎

(哲学者・立教大学大学院教授)

(東京農工大学名誉教授・棚田学会会長)



### 今までの災害と質が違う 「大災害」を生んだ原発事故

内山・私が暮らす群馬県上野村は、東日本大震災による直接的な被害ではなく、放射能問題でいえば東京並の放射線濃度ですが、影響は甚大です。というのは農作物の全量検査を続け、農家は本当にくたびれてる。村の農作物から万が一、基準値を超えるものが出来た場合、村の信用を失う。とくに、主要な農産物であるこの類は濃縮しやすく、全量をかなり正確に調べています。国の基準は10ベクレル/kgですが、村では20ベクレルという自主規制もしています。

千賀・一旦農作物の検査で高い放射線量が出てしまうと被害者はが加害者になってしまってしまう。他の災害ではあり得ない事態です。「大災害」といっても質がまったく違う。人類が築いてきた「科学技術文明」と「経済社会システム」の巨大な「ほころび」を目前に突きつけられた感じです。

内山・あの地域も平成の合併ででき、本當の意味で地元に密着した行政がない。私が今かかわっている福島県南相馬市では3年連続田植えができない状況です

九州の農産物でも10ベクレルを超えるものがありますから、今の地球には米ソの核実験の影響で10ベクレル程度の放射能が広がっているということでしょう。

また、地盤沈下で農地の基盤も狂い、区画もぐちゃぐちゃで農道もない。総合的ほ場整備が必要です。表面上は整えられても表面をちょっと剥ぐと中には細かい瓦礫がたくさん埋まり、田植機を使えば土中の瓦礫で機械のツメが壊れるような状況です。その上、所有権の確定もできず、亡くなつた方も遠くに出た人もいる。

そして補償の問題。次の展開を考えようすると、「補償が打ち切られるから」とブレーキがかかるんです。もちろん大きいハウスを建てて野菜を作ろうとか、やろうとしている人はいますが、全体的には、共同体を修復し直してやっていくことにはほど遠い状況ですね。

内山・あの地域も平成の合併ででき、本當の意味で地元に密着した行政がない。私が今かかわっている福島県南相馬市では3年連続田植えができない状況です

内山・あの地域も平成の合併ででき、本

地元に寄り添える行政があれば、行政と地元で集落ごとの再建を考えられたのですが、合併していると「すべての地域を平等に」というのが働いて結果として何もできない。国や県でも被害を数字で扱う以上、復興の問題は「復興予算」という数字になる。復興予算は必要だからいいのですが、数字が主体となつては復興ができない。復興そのものはコミュニティ



**内山 節**  
1950年東京生まれ。哲学者。NPO法人森づくりフォーラム代表理事。1970年代から東京と群馬県上野村を往復して暮らす。2010年4月より立教大学大学院社会デザイン研究科教授。近著に『清淨なる精神』(信濃毎日新聞社)、『共同体の基礎理論』(農文協)、『文明の災禍』(新潮新書)、『ローカリズム原論』(農文協)、『新しい共同体をデザインする』(農文協)ほか多数。

い、集落の問題だし、せめて昔の町村レベルの問題です。そこに寄り添う復興を目指して実現させには、数字はあくまでサポート役です。今回、行政として最後のところは市町村がやらなければならないのに、市町村がまるで小さい県のようになつてしまつてできなかつたのです。千賀・合併を見つめ直さないといけないです。復興の仕方も問題があり、大きな防潮堤の建設が大前提で進められています。本当にそれでいいのかという議論

結束力があり外部とのつながりをもつ共同体が強い

い、集落の問題だし、せめて昔の町村レベルの問題です。そこに寄り添う復興を目指して実現させには、数字はあくまでサポート役です。今回、行政として最後のところは市町村がやらなければならないのに、市町村がまるで小さい県のようになつてしまつてできなかつたのです。千賀・合併を見つめ直さないといけないです。復興の仕方も問題があり、大きな防潮堤の建設が大前提で進められています。本当にそれでいいのかという議論が現場でできていない。

作つたり。もともと地理的条件も含めて  
独自の小さな行政をもつていて、それが  
まさに集落機能ですが、それがしつかり  
していて、しかも外部とのつながりが強  
いからこそできるんですね。

**内山**：約50年前、フランスの牡蠣が病氣で全滅した際、ここから牡蠣の稚貝を送つて助けたんですね。そのお礼としてパリのルイ・ヴィトン本社が震災からわずか3ヶ月後、畠山さんのところに用途指定なしで巨額の支援をしているんです。

**千賀**：自分たちでやるにはちょっと大きい範囲ですね。

誰も知らないわけですから。大災害になつてしまふと集落の力だけで再建するのはむづかしい。コミュニティの力と外とのつながりの両方があつてこそ、地域は強いということははつきりしたんですね。

千賀：まさに、共同体の力ですね。地形的にある程度まとまりのある集落の方が、共同体は健全さを保つてゐるんでしょうね。しかも、農村の集落は長く「仕事と暮らし」のコミュニティとして存続してきたわけですから、このように「仕事」の見通しを立てるところこそ、地域復興の主体となる集落やコミュニティを構築できますよね。

日本は「自然と人間の  
共同体」をつくってきた

千賀：内山先生は著書の『共同体の基礎理論』の中で「自然と人間の共同体」について書かれていますが、私はこれが今、とても重要だという気がしてならないん

内山…こうした悪条件下でも部分的には、地元の人とそれを支援する外部の人との関係の中で復興が進んでいます。僕が仲良くしてきました宮城県気仙沼市の中山重篤さんは牡蠣養殖業を営み、「森は海の恋人」という活動で有名な人ですが、彼の西舞根(にしどりね)という入り江の小さい集落も津波に遭い、彼の家は高台で残ったものの、他の家は全滅でした。

ここも防潮堤を造る計画がありました  
が、西舞根の人たちの反対で中止になつたんです。三陸海岸の集落はどこに行くく  
にも山を越える必要があつて、小さい集  
落で互いに助け合つて生きてきた歴史が  
ありますから結束が強い。今回もみんな  
で高台に引っ越しました。ここは、中山

トントン社が購売責任を持つ、ウェイトン社によれば、森・海・川が一体的な世界をつくる考え方は日本にしかなく、しかも行動に移している人たちだと。この考え方を世界に広めることも支援だというのです。

畠山さんの息子2人は地元にいて、東京にいた1人も震災直後、会社を辞めて帰ってきています。跡取りが3人。だからこそ支援も入るんですね。

さんが以前からがんばっていたこともあって、外部の支援がいっぱい入っているんです。牡蠣の養殖再開も早く、外部のボランティアが山からスギを切って筏を

今回はつきりしたのは、自分たちのコミュニティがしつかりしていて、外部とのつながりをもつていると動けるということ。集落がしつかりしていても外部とのつながりがないと支援の手が入らない。

内山　日本は、住んでいる人たちが自然と自分たちの営みを通して共同体をつくりつていったわけです。それが自然と人間の共同体だった。そして、死者を含めた共同体としてもつくった。死者が遠くにいからず、死者がなお村を守っていく社会。自然と生者と死者を構成員とする共同体が、自分たちの営みの世界の共同体だつたんですね。

従来、ヨーロッパの共同体研究を基に共同体が語られてきましたが、僕の知るフランスの農村と日本の農村を比較すると、景観が決定的に違う。フランスの農



せんか ゆうたり  
1948年北海道生まれ。農学博士。東京大学農学部卒後、農林省、宇都宮大学を経て東京農工大学教授に。現在東京農工大学名誉教授。千賀まちづくり研究所主宰。棚田学会会長としても活躍。著書「水をはぐくむ」(農文協)、「よみがえれ、水辺・里山・田園」(岩波書店)、「中山間地と多面的機能」(共著、農林統計協会)「ゼロから理解する水の基本」(監修誠文堂新光社)など多数。

でも村方の代表です。領主権力が直接入つてきていない。だから、見せしめ的に人を集め広場はいらなかつた。

## The terraced rice field news



今年7月28日に山口・島根を豪雨が襲った。山口県では観測史上最大の雨量で、1時間143ミリ(山口市)を記録している

1：阿武町福田上久瀬原にある12000tの石原ため池の堤体中央部分がV字に決壊  
2と3：萩市須佐三原野、火打岩ため池の堤体が決壊し、ため池下流の市道及びほ場へ土砂が流入(水土里ネット提供)



2

1

3

きていて、その点でいえば、日本の方がずっと自治社会的性格が強い。それはおそらく鎌倉期に農民と武家が分離せず、武装した農民集団という武士社会ができるからでしょう。その後もこうした伝統から農村は形を変えながらも自治を続けてきました。そこがヨーロッパとは違います。千賀…さらにヨーロッパと日本では、「自然の力」の違いもあったのでしょうかね。ヨーロッパの自然は人間に対してそこまで強くない。狩猟や農業をするにしてもある程度、人間のコントロール下に置けた。ヨーロッパでは7～8世紀に教会の農地として輪作形態がイタリアではじまり、ドイツでは、連作障害を避けるため土地をローテーション利用する三圃式農業が行われ、この運営が共同体の重要な役割だった。こうした土地利用計画の管理を自分たちの自治としてやってきたのがヨーロッパ共同体の大きな特徴でしょう。

日本の場合、水や山を管理せず放つておけば、猛威を振ります。草木はどんどん生え、渇水も災害も起きる。だから、自然に対して何とか持ちこたえ、耐えうるぐらいの共同体をつくらざるを得なかつたわけです。日本は自然そのものが非常に強く、土地そのものを支配下に置けなかつた。だから、自然の中から我々の祖先が生まれ、我々も自然に帰っていくという、自然と同化するような意識とのの考え方ができたんでしょうね。

ただ、ヨーロッパは個人主義だといいますが、ドイツやフランスなどでは「自分たちの地域は自分たちで管理するんだ」という、地域を共同的に計画管理する意識を残した上で、個人の自由があるよう

に思います。共同体とかかわりつつの自由です。ですから、景観もまた個人の自由にはまかされていない。非常に厳しく規制されている。地域の伝統的な景觀をみんなで守っていく意識も強い。それは職人たちの仕事場にもなり、子どもたちの郷土愛も育む。日本以上に地域への愛着は強いですね。それはドイツで痛感したことです。

## 「3年以内に復元できなければ村に寄付」というフランスの村

内山…フランスの農村では今、歴史と文化と自然を軸にしたエコ・ミュージアム的な観光開発が進んでいます。ある村に行ったら、石で組んだ建物が多い村で、中世にできた石造りの民家を復元しているんです。2～3階建てで石を全部組み直しますから1億円以上かかるでしょう。

村の人に費用はどうしているのかたずねると「村の予算です」というのですが、県と州の予算、それから国予算とEUの文化予算で復元しているわけです。

「民家だから所有者がいるんじゃない

の？」と聞くと「おります」というんです。その折り合いについてさらにたずねると「所有者は壊れた家を3年内に復元しなければいけない。3年以内に復元しなければならない」という条例をつくった」というのです。そうすると「全員が寄付した」と。日本ならば「俺の家は俺の自由だ」となりますから「その条例は通ったの?」と聞くと「村が大事とわかっているから通りました」という。



千賀…いやいや、だんだんこういう気運になつていくのかもしれないですよ。というのもこの前、日本景観学会が白樺湖の湖畔でシンポジウムを開いたのですが、そこは使われていないホテルや小旅館がたくさん出てきていて、その廃屋をどうするのか大問題です。日本の法律上、個人所有だから手が受けられない。でも、誠に景観上悪い。今、この問題は日本中どこでもあって景観学会として本格的に考えはじめているんです。

今年7月28日、山口島根豪雨の災害から。  
豪雨直後。萩市むつみ高佐下地区の状況。  
田んぼ一面が海(水土里ネット山口提供)



## 自然と触れ合っている 子ほど地元が好き

千賀・さらに「自然と人間との共同体」について考えると、研究室で「子どもの自然遊び」について調べたことがあるんです。滋賀県甲良町や埼玉県川越市など3~4ヶ所で、小学校4~6年生にアンケートを取った。「よく外で自然と触れ合って遊んでいるかどうか」「地元の地域が好きかどうか」、川越では「将来もここに住みたいか」というアンケートを取って、クロス集計したのです。

そうすると見事に「外でよく遊んでいる子ほど地元が好き」と優位の差が出た。川越では「将来もここに住みたい」とい

うのも圧倒的に多かった。だから、子ども時代の育ち方、育つ環境、育つ場、あるいは遊びの質のようなものが私は非常に大事だと思うのです。共同体の小さな構成員をどう育てるのか、まだきちんと議論されておらず、点数を取るためにだけの勉強になっていて非常に問題ですね。

そして、外での遊び場もなくなっている。皮肉なことですが、高齢社会で高齢者が自分たちの遊び場を地域で開いはじめている。神社の境内をゲートボール場として使って子どもたちを入れなかつたり。大人たちに子どもが育つ環境、条件に対する認識がほとんどない。人間というものは可塑性あるし、適応能力があるから何とでもなると思い込んでいる。

先ほどのアンケートでは、父兄にもアンケートを取って「子ども時代に外でよく自然と触れ合って遊んだかどうか」と「町づくりへの関心」をクロス集計したんです。これも優位な差が出た。子ども時代に地域で遊んだ大人ほど今、この町をどうしようという意識が高かつたんですね。それらもまじめに議論しなきゃいけない状態じゃないかと思いますね。

内山・最近知つて興味深かったのは、小中学校の学力テストで成績の良い県悪い県が出て騒がれていますが、ある調査結果で「学力テストの成績がその地域社会の塾密度と反比例する」というもの。

つまり、塾密度は学力向上に何ら寄与しないと。正確にいうと学科ごとに多少違ひはあって、数学や理科はそう関係しないのですが、国語は完全に反比例です。

千賀・逆にいえば、よく遊んでいるといふことですよ。

者が自分たちの遊び場を地域で開いはじめている。神社の境内をゲートボール場として使って子どもたちを入れなかつたり。大人たちに子どもが育つ環境、条件に対する認識がほとんどない。人間というものは可塑性あるし、適応能力があるから何とでもなると思い込んでいる。

先ほどのアンケートでは、父兄にもアンケートを取って「子ども時代に外でよく自然と触れ合って遊んだかどうか」と「町づくりへの関心」をクロス集計したんです。これも優位な差が出た。子ども時代に地域で遊んだ大人ほど今、この町をどうしようという意識が高かつたんですね。それらもまじめに議論しなきゃいけない状態じゃないかと思いますね。

内山・最近知つて興味深かったのは、小中学校の学力テストで成績の良い県悪い県が出て騒がれていますが、ある調査結果で「学力テストの成績がその地域社会の塾密度と反比例する」というもの。

つまり、塾密度は学力向上に何ら寄与しないと。正確にいうと学科ごとに多少違ひはあって、数学や理科はそう関係しないのですが、国語は完全に反比例です。

千賀・逆にいえば、よく遊んでいるといふことですよ。

内山・ええ。国語はどちらかというと思考力の学科になっていて、そこに著しく出たということですから。いわれてみると外で遊んでいる子の方が思考力があると思いますよね。

千賀・共同体は、共同体のシステムの中に子どもを育てるプロセスをもつていてありますよね。地域の中でお祭りや行事、それから少年団などを組織するのも大人がお膳立てしながら、それなりの役割をそれなりの子どもたちに与えてリーダーが育つ工夫をしてきた。そういう共同体のもつてている人間を育てる機能がものすごく大事なのに、ほとんどなくなってしまっている。都会はなおさらです。共同体の機能をこういう側面から見ていくことも大事じゃないかと思つてゐるのです。学校教育にできないことはたくさんある。

そう考へるとドイツは、小中学校の授業が昼の1時頃までで、親も近くで働いていますからみんなで食事を取る。そのあと、大人は職場に戻り、子どもたちは所属している地域のクラブに行く。それは大人も含めたクラブなんですが、バレー、ボルダリング、野球、音楽などさまざま。それを夕方までやっている。こうした地域の機能がすごく大事だと思うんです。



## 子どもの教育も 共同体が担ってきた

内山・日本の伝統的教育でも一番重要な役割を果たしてきたのが「若者組」ですよね。若者たちに村の祭りなどを任せることで、その組の中で年長者は年少者に教えながら取り組む。行事の準備はいろいろ必要です。うちの村だと小学2~3年生を最年長とする「わらし組」のようなものがあつて、そこに任される行事が「花祭り」です。神仏習合の伝統からか神社の境内で行い、野の花を摘んできて撒き、甘茶を振る舞う。甘茶を汲む柄杓や器も竹で作り、飾りつけなどの準備に3~4日かけますが、大人はまったく手を出さない。当日訪れる人数も自分たちで考へるわけです。そして成長とともに、むずかしい行事に移つていくんですね。

上野村の隣、埼玉県旧吉田町(秩父市)では、「若者組」の卒業式として、ロケッタで考へるわけです。そして成長とともに、むずかしい行事に移つていくんですね。

上野村の隣、埼玉県旧吉田町(秩父市)では、「若者組」の卒業式として、ロケッタ



新潟県上越市安塚区で冬の朝、子どもたちが集落を回って行う「鳥追い」行事



「火回し」という行事があつて、小学6年生が中学1年生がロープの先につけた藁の束に火をつけ、自分の体の周りでぐるぐる回す。それは神社のお祭りであります。なくなつた行事の復活も考へる必要がありますね。

内山・復活させようという話はうちの村では絶えずありますね。子どもたちはお小遣いに入る行事は未だにやっていますよ（笑）。

ト祭りの「龍勢」があります。あの地域は昔、火薬を使う必要があったのでしょう。だから最後に火薬を使つた龍勢（ロケット）を飛ばした者が若者組を卒業したんです。このプロセスが教育で、共同体の中ではとても重要だった。子どもは大人がいうと「うるせえ」となりがちですから、先輩が後輩に教える仕組みがとても機能したみたいです。

また上野村では4月3日に、河原に石を積んで行う「ひな祭り」が行われます。最近は行政がユニボで石を積み準備していますが（笑）、昔は小学6年生ぐらいまでの子どもたちの役目でした。2ヶ月ぐらいかけて石の組み方を教わりながらやる。うちの村は山が急峻ですから昔は石が組めないと家も畑もできない。それの中で役割を任され、生きながら勉強するという、この勉強があつたんですね。

千賀・今も神楽や民俗芸能などはありますね。地域の行事を子どもたちに引き継ぐことも重要ですね。滋賀県甲良町には

## 小さな共同体を積み上げての共同体的社會を

内山・今まで「共同体」という言葉を地域組織のイメージで語りすぎたのです。

上野村は、地域組織的共同体がしっかりとある方だと思いますが、その中に小さな共同体もある。集落をはじめ神社やお寺関係、仕事別など小さな共同体がいっぱい積み上がって、地域社会が共同体的社會になつてているんです。この形があるから助け合いもできる。

たとえば、自宅療養の1人暮らしの人がいるとき、それが昼ご飯ぐらい持つっていく。それが続くと負担になつてしまいますが、いくつかの小さな共同体が積み上がっていると自然に行政も含めた役割分担ができる、長期にわたる支援態勢が組めるわけです。

そう考へると都市部でも1人が複数の共同体に所属しメンバー同士で助け合える都市型共同体は可能です。ただ今まで都市部では「引っ越すかもしれないし、子や孫が住むことは想定しない」というよう

実は、福島県相馬地域は天明の大飢饉のときに人が減り壊滅的になつたことがあります。そのときに富山から支援がかなり入つたんですね。富山の人にいわせると、浄土真宗で子どもをみんな大事に育てた結果、富山では次男坊三男坊が増え、いわば農村過剩人口だった。だから、淨土真宗つながりでどつと相馬地域へ支援に行き、そのまま住み着いたんですね。人は移動性や変動性をもちながら、絶えず巧みに自分たちの世界、農村共同体をつくってきた。これを震災後の今も思っていいと思います。

千賀・比較的の自由で、出入り自由な共同体というあり方を含め、地域の中の定着的な共同体とうまく組み合わせる形で存在させていくのは大事でしようね。

昔からいる人たちのコミュニティはその地に何年いたかが重要で、プライドにもなるし信頼にもなつていて。それが新しい住民とそりが合わない一因ともなつていて。けれども移動を前提にすれば、新しい住民を受け入れるのはむずかしい話ではないような気がしますね。

内山・群馬県旧赤城村（渋川市）には国

これは今度の福島の事故で見えてきた課題です。原発事故のため、否応なく移動せざるを得ず、移動してもコミュニティ機能の維持が可能かどうか考へる必要があつたのですが、そういう視点を行政は持つていなかつた。けれども実際、避難した人たちは避難先でコミュニティをつくりたり、地元の別の人たちとつながつて一緒にやつています。移動性を内部に組み込んだ共同体の在り方が、現代的な課題としてあるのです。

実は、福島県相馬地域は天明の大飢饉のときに人が減り壊滅的になつたことがあります。そのときに富山から支援がかなり入つたんですね。富山の人にいわせると、浄土真宗で子どもをみんな大事に育てた結果、富山では次男坊三男坊が増え、いわば農村過剩人口だった。だから、淨土真宗つながりでどつと相馬地域へ支援に行き、そのまま住み着いたんですね。人は移動性や変動性をもちながら、絶えず巧みに自分たちの世界、農村共同体をつくってきた。これを震災後の今も思っていいと思います。

千賀・比較的の自由で、出入り自由な共同体というあり方を含め、地域の中の定着的な共同体とうまく組み合わせる形で存在させていくのは大事でしようね。

昔からいる人たちのコミュニティはその地に何年いたかが重要で、プライドにもなるし信頼にもなつていて。それが新しい住民とそりが合わない一因ともなつていて。けれども移動を前提にすれば、新しい住民を受け入れるのはむずかしい話ではないよう気がしますね。

重要有形民俗文化財の舞台で演じられる農村歌舞伎があつて、役が世襲制です。

この役はあの家の跡取りがやると決まつている。ですから、村を出ていても祭りの前には毎週帰ってきて練習するわけです。そのうちに戻つてきたり……。

かつては、村の構成メンバーと役の数はあつてたのですが、住宅地も増え、見物はできても演じられない家の人もじわじわできてきた。その人たちを座に入れるかどうか前から議論はあつて、でも昔はその人たちから希望がなかつたのです。けれどもここ20年ぐらい「われわれもやりたい」と話が出てきて、入れるかどうかの議論が散々あつた。どうしたかというと新しく座をつくつたのです。昔からの座は今までどおりの世襲で、新興の座に旧の方が全面協力して役を教える。座を増やす形で解決したのです。

## 戦後、共同体から出て自由な個人になろうとした

内山：戦後、われわれは「共同体から出て自由な個人になるんだ」という時代をつくり出し、新しい都市の社会制度や考え方まで一つの習慣ができるがつたわけです。けれども今、それが明らかに自由を窒息させている状況なのです。

フランスの哲学者、ベルクソン（Henri-Louis Bergson 1859～1941）が『創造的進化』の中で「自由は、自由を実現するために新しい習慣をつくり出す。ところが、それが不斷に革新されていく努力を失いた瞬間につくり出された習慣が自由を窒息させる」といっています。軸に

なる文章ではないのですが、そのとおりなんです。自由を実現するために、人はいろいろな面で新しい習慣をつくる。その自由自体が革新され続けていれば、自由がつくり出す新しい習慣も絶えず革新されるわけですが、その努力を欠いた瞬間に習慣は自由を窒息させるのです。今、そういう時期だという気がします。

僕のところの学生の修士論文で、コミュニティがなくなりお葬式が維持できなくなつたという「お葬式」の研究がありまして、今、お葬式があがらずにあの世に行く人が全国で5%、東京では10%もいるというのです。その典型が孤独死です。日本には「一番近い親戚が葬式をあげなければならない」という法律があるのです。警察が捜すと結構息子や娘がいて、「20年会つていらないし、なんで私が」という話になる。最後は「法律で決まつております」と。すると「費用は出すので、そちらで火葬場に運んでください」となるわけです。火葬場から墓があれば墓へ直行です。その間に1人も手を合わせていない。これは、社会としては異常な状態です。まさに個人になつていくことに自由を感じてつづった習慣が、個人の自由さえ窒息させているのです。

千賀：農村も近代的な「自由」という概念が入つてきて、農村で暮らしていくともむずかしいか。その習慣が破綻するまで、その今まで生き続けているのです。

内山：戦後、われわれは「共同体から出て自由な個人になるんだ」という時代をつくり出し、新しい都市の社会制度や考え方まで一つの習慣ができるがつたわけです。けれども今、それが明らかに自由を窒息させている状況なのです。

フランスの哲学者、ベルクソン（Henri-Louis Bergson 1859～1941）が『創造的進化』の中で「自由は、自由を実現するために新しい習慣をつくり出す。ところが、それが不斷に革新されていく努力を失いた瞬間につくり出された習慣が自由を窒息させる」といっています。軸に

るようになり、ある意味、自然から自由になつていつたんですね。自然から自由になつた先の今、じやあどうするんだと次の価値観の形成が必要ですよね。

## 伝統回帰の時代へ

内山：これから時代方向として100%伝統回帰だといい切つてもいいと思つています。われわれは伝統に戻る。それが今まで必要な時代に来たと。片方では

昔から守つてきただものが壊れていく歴史は続いていますが、歯車を逆に回そうという人たちはいろんな分野に出てきています。棚田も棚田だけではなく、棚田を守つてきた世界があり、視線は伝統回帰といい切つてよいと思います。ただ、昔のままの形ではむづかしい。

たとえば、うちの村でも燃料を全部薪にしようと進んでいますが、生活形態も家族

数も変わり、全員が薪というわけにはい

かない。だから、村としてはペレット工場を建て、ペレットを使つた燃料利用を進めています。ペレットだけを見ると、新しい技術で新しい村をつくるわけですが、

考案方は「伝統回帰」。燃料は地域の木に戻る。それで発電も考えています。

つまり、新しい技術を導入すること

で伝統回帰するわけです。伝統に戻るためにどういう新しい技術が使われるのか考案するか、どういう新しい方法ばかりに目を奪われると根本を間違えます。

千賀：農村も近代的な「自由」という概念が入つてきて、農村で暮らしていくともむずかしいか。その習慣が破綻するまで、伝統回帰のために新しいものを利用する。人とのつながりでも今は交通が発達し、昔はできなかつたようなつながりもできる。今は、新しい形

で外の人とつながれる時代です。

千賀：「伝統」を意識し、それを望む若者が

増えている実感はありますね。私の教え子も続々と農村に入っているんですよ。女性たちも。きっかけは伝統的な織物での技を学びたいというものがつたり。そこ

で地元の方と結婚したケースもあります。

だから、農村の方々には、農村の今あ



# 記録的豪雨から1年、つづら棚田5戸の集落は

取材・文：石井里津子

平成24年7月

13・14日の九州北部豪雨に

よって、福岡県うきは市つづら地区では大規模な土砂崩れが発生した。つづら地区は、日本の棚田百選にも選ばれた棚田の集落で、5戸18人が山や棚田とともに暮らしを営んできた。

平成10年には棚田オーナー制度にも取り組み、真っ赤な彼岸花が棚田の山里を彩る「棚田inうきは」を始めた。

朝6時頃、雷に似たカラカラいう音がして見よったら、家の上にある山や田畠が少し崩れてたんですよ。雷みたいな音は石と石があたる音でした。そのうち家にも水が入ってきて、親も一緒に4人で、歩いてすぐの公民館(集会所)へ行って…。近所の人も「怖い」やって荷物持つて避難してきて。もう道は川のようで、足を取られて転げてくるおばちゃんもいて。その後、公民館よりつづら山荘の方が米も食べ物もあるし、ええやろうやうつて、10時過ぎにみんなで歩いて移ったんだす」

つづら山荘とは、平成23年4月にオープンした集落運営の農家民宿である。古民家を市が改築したもので、農村観光や体験の拠点となっている。

「集落の5軒中4軒が避難したんです。もう1軒は70代と80代の夫婦で、水が道にあふれていて『年寄りやけん、出きらん』ゆうて。僕も『そしたらおばちゃん、家におつてください。じつとしつてゆうてね』

「彼岸花めぐり」イベントは、平成25年で19回目を迎えた。約20年にも及ぶ、棚田を生かした地域おこしの取り組みが、応援隊ともいえる「つづらファン」を生み出し、それが災害後の支えとなっていた。

## 思いも寄らなかつた土砂崩れ

7月14日の未明、前日から続く雨は尋常ではなかった。区長の小河孝幸さん(56)はその朝の様子をこう話す。

「朝6時頃、雷に似たカラカラいう音がして見よったら、家の上にある山や田畠が少し崩れてたんですよ。雷みたいな音は石と石があたる音でした。そのうち家にも水が入ってきて、親も一緒に4人で、歩いてすぐの公民館(集会所)へ行って…。近所の人も「怖い」やって荷物持つて避難してきて。もう道は川のようで、足を取られて転げてくるおばちゃんもいて。その後、公民館よりつづら山荘の方が米も食べ物もあるし、ええやろうやうつて、10時過ぎにみんなで歩いて移ったんだす」

つづら山荘とは、平成23年4月にオープンした集落運営の農家民宿である。古民家を市が改築したもので、農村観光や体験の拠点となっている。

「集落の5軒中4軒が避難したんです。もう1軒は70代と80代の夫婦で、水が道にあふれていて『年寄りやけん、出きらん』ゆうて。僕も『そしたらおばちゃん、家におつてください。じつとしつてゆうてね』

全を考えた。つづら山荘に避難したメンバーはご飯を炊き、あるもので昼を済ませ状況を見守った。その後も豪雨は容赦なく続き、ついに大規模な土砂崩れが起きたのである。小河さん宅の上から、まさに山が崩れてきたのだ。棚田をのみ込み、谷川沿いを濁茶苦茶にしながら下流へと土砂が押し流された。幸い、つづら山荘は谷沿いではなく、難を逃れたのだった。

山荘の窓から外の様子をうかがつたとい。集落全体が見えるわけではない。小河さん宅も母屋は見えながら、納屋の無事は確認できた。「じつとしどつて」と頼んだ一軒の家は見えず心配が募った。電話しても出ない。小河さんは自分の判断に大きな責任を感じたという。

その後、消防や行政の応援も受け、メンバーはつづら山荘からもつと下の避難所へ移動した。「じつとしどつて」と頼んだ夫婦とも電話が通り、無事合流できた。

翌日、集落に戻つて小河さんは言葉を失う。自宅の納屋や蔵は歪みつつも無事だつたが、母屋がすっかり流されていたのである。そして、近所のもう1軒も全壊し、もう1軒には土砂が流れ込み、3戸が家を失つた。初夏の緑に輝いていたはずの美しい棚田の集落が見るも無惨な姿になっていた。棚田オーナーの「マイ田んぼ」にも土砂が流れ込んでいた。つづら棚田6ha約300枚のうち、約50枚が被害を受けたのだった。

「トドケが崩れるわけなかろうもん、と思ひますが、昔から集落の人は『何か

あつたら田の口に避難しろ』と言つてきたん

です。違つたなあ」

家の造りや水の確保

など、大勢を受け入れ

する余裕ある家という見

方からだつたのであろ

うか。地盤が緩いわけ

でもなく昔から地区の

誰も大規模な土砂崩れ

を予想してこなかつた。

災害から1年以上が過ぎた今も家再建

の見通しは立つていない。田んぼは、激

甚災害の指定を受け復旧工事がはじまつ

ている。だが、来年の田植えまでの復旧

はむずかしく、いくらかは秋の彼岸花シ

ーズンには復旧可能だろうという。地元

はこの状況に泣い顔だ。

「彼岸花めぐりの時に毎年、新米を販売するのですが、被害が甚大で、売る米用の早稻が、見せる稻穂用に晚稻か、どちらを優先して作るか地元は困るんですね。でも、売る米を優先して地元が潤つていかないとい

んな次頑張ろう」という気にならないんじゃない



右写真が区長の小河孝幸さん  
母屋跡に建つのは工事用のプレハブだ  
左写真は、つづら山荘の前で野上知子さん





「うきは市山村復興プロジェクト」活動のようすから。(うきは市提供)

右写真は、今年6月、福岡都市圏の水源の森ツアーリー開催に合わせ、森林セラピーと石積み復旧作業を行った。石垣保存会の指導を受けながら、子どもたちに裏込めの石(グリ(栗)石)を入れてもらった

山が大きく崩壊し、谷沿いの棚田が次々と崩れた（うきは市提供）

かと思うんですね」  
市農林・商工観光課山村振興係の熊谷重一郎  
孝さんが説明してくれる。

## つきは市山村復興 プロジェクト」始動

「彼岸花めぐりで出でないと、シイタケなど干し物などもすいぶん前から準備してね。一年分の収益がこの時に得られるくらい大きいんです。毎年売り上げが伸びていて、『来年もつとがんばろう』ってみんなやってきまして。おにぎりが人気です。自分たちで漬けた奈良漬け添えてね。朝早く一俵炊いてみんなで握るんですよ」つづら山荘の世話をする地元女性の一  
人、野上知子さんが話してくれた。

市・棚田保全団体等で発足し、「うきは山村復興プロジェクト」がスタートした。このプロジェクトでは、災害で困っている箇所を調査し、保存会のほか一般ボランティアを募集して復旧作業に取り組んでいる。農地の土砂撤去、水路の泥上げ、石積みの補修など細かい作業を担う。つづら棚田のオーナーたち120人も、また彼岸花めぐりで訪れていた人たちもボランティア作業に参加した。もちろん被害はつづら地区だけではない。市の山間部のいたるところが災害に見舞われている。これまでに7回、市内

「でも、道がまだ危なかったりと安全にまで頭が回らんで。行政と話して昨年は中止としました。でも毎年やっていますからみんな知っていて、大勢の人が来てくれたんですよ。オーナーさんも心配して来てくれて。帰つて行くとき、みんなが『頑張つてください』と語ってくれて。その言葉だけで元気がわいてきました」以前から続けてきた取り組みが、集落を前向きにさせたのである。

「地元が行政や外の人と一緒にになつてがんばつて進んでいけば、どうかで何かが何とかなるんじゃないかと思つんですねよ」

東日本大震災の時、「東北緊張る」  
言つてきたのに、つむりものそのまま終わ  
ったんじやいかん。何か、せなならん。自  
分たちががんばらんと、外の人ばかりが  
がんばってるんじや何もならん。前向き  
にみんなで『やろう』と。

「災害後しばらくやり切れなくて。もう  
どうでもいい、下に下つてもいいかな  
と。でも、いろんな人たちが支援してくれ  
て、少しづつ気持ちが変わって。前に進ま  
んばかりで、彼岸花めぐりの開催をどう  
するか、集落みんなで話し合いました。

59ヶ所の地区で復興プロジェクトのボランティア作業が実施され、参加者総数は770名にも及んだ。

後漢書

『昔は強制的に跡継ぎに田いぼをやらせたでしきうが、今、子じわたりは別。それを一緒にやつてこくには工夫がある。『かいつせせだといひの金にもなれいと』といひのやとはなく『いにせ圓田づ。やつたる』と書つやうに仕向かしてかえど。まあ、手伝ふに来たら飲ませ喰わせで、はすかなじよりにやつてほむ(笑)。

ん」、みんなそんな意識が強い。災害後、集落内に暮らすのは2戸となつた。小河さんははじめ、家を失つた人たちは下の方で借家暮らししだが、農作業に来たり、つづら山荘に働きに来たり、みんなつづりから離れない。

代の人が中心ですからね。災害もあって子どもたちの希望もわからんし、逆に、新しいつながりができる何がはじまるかもわからん。自分一人じゃないですもんね。ただ今は一生懸命やるけん、お手伝いばお願いしますゆうて、やる気もって

復興していくだけです  
前向きな気持ちが未  
来を照らしていた。

災害時に山から流された樹を利用して  
市内の人作った看板

「うきは市山村復興プロジェクト」活動のようす  
下瀧の棚田にてボランティア作業(うきは市提供)

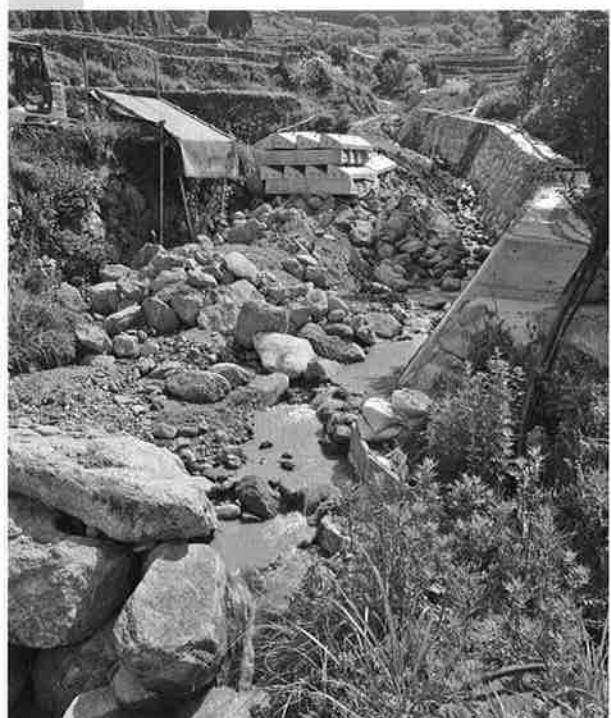
地域に本気で暮らす人さえいれば、再生の可能性のない地域などない

色川地域振興推進委員会 会長 原和男

—昨年の台風12号は色川地域にも大きな被害を及ぼした。未だに土石流跡はその爪痕を顕に残したままだ。今思えば、全国的にも有名な多雨地帯といふこともあって、「大きく崩れる所はもう崩れてしまっているだろう」といった安心感が無意識に私の中には拡がっていた。

10数年前の大雨で下流域かほんと浸水し大きな被害が出たときも、色川地域もかなりの被害はあったが、決して想定外の状況ではなかった。その時の雨量が700mm、今回は1200mm、数字で見ても異常な量だが、その被害はまさに私にとっては想定外だった。何百年に一回というクラスの自然災害のようで、百歳近い村人が「生まれて初めての経験」というのだから、30数年しか色川に暮らしていない私のような者が「想定外」と捉えたのもおかしくはない。

しかし、代々を重ねてきた人たちを見ていて、この人たちにとつては「想定外」ではなかつたのだろうなと思うようになつた。黙々と家に流れ込んだ土砂を掻き出す姿を見ていても、その淡々とこなす姿に「想定外」の雰囲気は感じられなかつた。災害の翌朝から区長さんの呼



色川地区、小阪の棚田を潤す谷川の復旧工事は未だ続く。色川地区は215戸中70戸が「ターン者」という地域。小阪の棚田では「棚田を守ろう会」を中心となり棚田での農作業に都市の人を呼び込んでいる。



び掛けに皆が集まり、被害状況を確認し、合ひながら阿吽の呼吸で役割を担い合ひ、そんな光景から感じられたのも「想定外」からくる戸惑いではなく、ただ目の前の状況を皆でじっかり受け止め対処する、そんな住民のさりげない底力だった。

地域の中のかつての災害跡地を回つてみると、河川周辺に流れてきたのである。大きな岩が点在する大土石流跡は結構多い。しかし、大きな岩ばかりで小さな石は不思議なほど見当たらぬ。色川地域では、宅地も田畠も石垣を築いた上に出来上がっているが、この膨大な量の石

為せる技 恵みだけを得られるなんてことはあり得ないことを充分に承知しているからこそ尚更に平穏を祈る、そこには自然に生かされているということを感じ的にわかつてゐる世界がある。

を一体どこから運んできたのだろうと不思議だったが合点がいった。こういった災害時に流れ出た石を一つ一つ運び出し積み上げたに違いない。災害の裏側に隠された自然の恵みといえるかもしけない。しかし、いじょう表現をしてしまって第三者的で当事者意識からは離れる。山村に暮りす者にとっては、自然による災害を受け止める」とと自然による恵みを受けることは同じ次元のことのようだ。村の神社で御神体に向かってひたすら手を合わせ祈る村人の姿からは、平穀をひたすら祈りつつ無事に収穫できた稔りに心から感謝をする、そんな思いがひしひしと伝わってくる。災害も恵みも自然の為せる技、恵みだけを得られるなんてことはあり得ないことを充分に承知しているからこそ尚更に平穀を祈る、そこには自然に生かされていふということを感じ的にわかっている世界がある。

拶用語だ。機械も車もない時代、田畠に生かされる日常は、ただただ汗を流し続ける毎日、田植えや稻刈りに象徴されるようにお互い助けたり助けられたりの繰り返し。自ずと「毎度おーきによー」と互いに感謝し合い、共に生きていふという実感から自然と強い「わがら」意識が生まれる。そんな『わがら文化』とでやかん言つべき、人と人との強い関係性が程度の差こそあれ日本中どこの農山村にもまだ残っている。その強い関係性がどうれほど災害時の対応力を高めるかは説明を要さないだろ？。

地域に、本気で暮らす人さえいれば、再生の可能性のない地域など決してない。



# 「田舎の力」が災害から命を守る

島根県吉賀町

総務課(災害防災担当)

桝木昭典

島根県吉賀町(旧柿木村)の大井谷の棚田には、集落の一番上に、山の湧水を一度受け止めて溜める「はんじう(＝瓶)」(写真上)があります。天然の岩をくり抜いたもので、昔から「助はんじう」と呼ばれています。かつて、大干ばつがこの地を襲ったとき、集落でこの「はんじう」の水を分かち合い生き延びたという伝えがあり、この名で親しまれています。

農山村には今もこのような互いに助け合う意識が集落の根底にあり、それが災害時に重要な役目を果たしています。かつて「結い」など、共同体で生活をしてきたベースが残り、勤めに出るようになつた現在でも、冠婚葬祭や道路や水路清掃など集落みんなで共同作業を行なっていますから、全体意識もあります。だから「お互に助けあわんといけん」と思つてゐるのです。隣の人の息遣い、心遣いを感じる暮らしがあるから、災害時に自ずと助け合える。行政による防災無線や防災メールなども重要ですが、隣の人の声かけや互いに避難しあつとに勝るものはないと思つていています。



8月19日に町で行った消防団員の土砂災害や水害を想定したDIGという図上訓練のようす。図上とはいえて日常的な活動や人づきあいあってこそこの訓練。消防団もスキルアップを目指す

今年7月28日、島根と山口を集中豪雨が襲い、吉賀町でも旧柿木村の地域で24世帯が避難しました。町は避難勧告を出し、住民の方々は自主的に一人暮らしのおばあちゃんにも声をかけ、近所と一緒に避難をしてくれたんです。最後は、消防団が一回戦で一戸一戸回つての声かけでした。

そして今回、女性消防団員の活躍がありました。女性は団員の1割と少數ですが、炊き出しを含め避難所運営、お年寄りのケニアなど女性消防団員の「フオロー」が大きく目立つていています。人手が少ない分、女性たちのつながりや「分配り」が重要でした。

農山村地域には、「横のつながり」があり、また、子どもたちが祖父母や

父兄の行動を見て育ち、一方で消防団員はOBから受け継ぐという「縦のつながり」もあります。これが「地域で助けあわんといけん」という精神をつないでいくのです。これこそが田舎の力です。

8月30日から気象庁が「特別警報」を出していますね。「数10年に一度の災害です。命を守る行動を取つてください」といつも

の警報を聞いてからでは遅い。また、自治体が出す「避難勧告」もそれを強めた避

難指示」も強制力がない。そのため、「おれはもういい。年じやけえ、このままで」と避難しない人も出でてくる。でも、隣の人

が「一緒に逃げよう」となつたら、「隣の人が言つむんじやけえ」と避難する。こうした田舎の力が、災害から命を守る大きな役目を果たすわけです。

それでも、県、他市町、県土連からの応援を得て、金剛的な体制で災害復旧に当たつたところ、矢先、8月23日からの再びの豪雨により、江津市、浜田市、邑南町を中心にこれまで以上の災害が発生しました。

これまで経験したことがない短時間の激しい降雨量により、数軒しかない小さな集落の多くが孤立しました。これまで、地域の土木業者が大雨の降る中、道路の通行を確保するために懸命な努力をし、孤立することがないよう、また被害の拡大を少しでも防いでいましたが、公共事業等の減少に伴い、業者数の減少、従業員の減少により対応できなくなつてきています。

# 2013年夏、豪雨に見舞われても

水土里ネット島根 常務理事

渡部明孝

8月27日、県内11の棚田地域住民が一同に集い、情報交換を行う「しまねの棚田ネットワーク情報交換会」を予定し準備が進められましたが、7月28日、津和野町を中心とした豪雨により甚大な被害が発生し、やむなく中止となりました。

典型的な中山間地域を襲つた豪雨は、過疎化、高齢化、農林地の荒廃化など、多くの問題を抱えながらも必死に農地を守つてきていた住民に、大きな衝撃を与えるました。町役場も、ラインの確保を貢つた後に応急してきましたが、市町村合併による技術職員不足から、なかなか農地等の被害把握、また、被災農家の相談に対応し切れない状況にありました。



それでも、県、他市町、県土連からの応援を得て、金剛的な体制で災害復旧に当たつたところ、矢先、8月23日からの再びの豪雨により、江津市、浜田市、邑南町を中心にこれまで以上の災害が発生しました。

これまで経験したことない短時間の激しい降雨量により、数軒しかない小さな集落の多くが孤立しました。これまで、地域の土木業者が大雨の降る中、道路の通行を確保するために懸命な努力をし、孤立することがないよう、また被害の拡大を少しでも防いでいましたが、公共事業等の減少に伴い、業者数の減少、従業員の減少により対応できなくなつてきています。

このように、周りの人たちと連携しながら必死で地域を守るとしている人たちの姿を見て頭の下がる思いです。

棚田を含む中山間地域の美しい風景を未来につなげるには行政のみならず、地域外の人々の支援も必要あります。

被災された地域のいち早い復旧により、地域住民に笑顔が戻ることを願つものあります。

# 福島県いわき市から

## 苦境を乗り越え仲間を信じ、命をつないでいく

株式会社 相馬屋 代表取締役  
(福島県いわき市)  
個人正会員

千年に一度と云われる巨大地震と、忌まわしい原発事故から2年半が過ぎた。ここ、いわき市では未だ復興は進んでいない。

市内17カ所にある仮設住宅人口は、一向に減る傾向はみられない。仮設住宅は約3500戸あり、ほとんどが原発近辺に住む方で、住み慣れた故郷を止む無く離れ入居している。いわきで、被災された方の入居戸数は、1割にも満たない。仮設住宅で暮らす人たちが先の見えない不安から、疲労の色が濃く見える。現在は、市内17カ所に、1500世帯の災害公営住宅が建設中である。

人口も約3万人増えているといわれて

米を愛し福島を愛し、苦境を乗り越えようとがんばる相馬屋のみなさん。中央が佐藤さん



米を愛し福島を愛し、苦境を乗り越えようとがんばる相馬屋のみなさん。中央が佐藤さん

いる。いわき市内の病院、スーパー、コンビニも、相変わらず人で溢れている。復興の名のもとに全国から工事業者等の人々が集まり、市内のホテルは満室状態。店じまいを考えていた民宿も息を吹き返している。道路は車であふれ、静かだった夜の街も人とぶつかりそうなほどに賑やかだ。住宅とアパートの新築ラッシュは、止まるこことを知らない。あと何年続くのだろう。土地の価格も上がる一方で、こちらも止まらない。

原発事故の風評被害で、売り上げが半減した当社のような米屋もあれば、市内のあるトマト農園は、原発前よりも売り上げがグーンと増えているという。同じ農産物を取り扱っているながら、この違いは何か……。自問自答し、この苦境を乗り越えるべく模索中である。

福島の米は、昨年度(平成24年)産米より、30キロ玄米1袋ずつ、放射能スクリーニング検査を行っている。安全が確認されているにもかかわらず、敬遠されがちである。なぜだろうか。お店にお米を買ってくる人たちも、やはり福島から離れたところのお米を望む人が未だ多い。稻作農家でさえも、自分の手で丹精こころ育てた米を目の前で放射能スクリーニング検査を行い安全が確認されたもの

でさえ、自分の口には入れても孫に食べさせるのは憚られるという人がいる。震災以前に戻る日がくるのだろうか。あるとしたのなら、いつなのだろうか。原発事故の風評被害によって、当社では、精米工場の約半分を長野県にやむなく移転した。福島県以外のお客さまから、「福島県で精米した米や、袋詰めしたもののはイヤだ」という声が多くたからだ。「取引を中止せざるを得ない」という声もあったのは確かだ。

若い男性社員が住み慣れた「いわき」を離れ、長野市で仕事をし生活している。避難したのではない。1年が経ち、仕事も生活もようやく慣れてきたようだ。何も言わず頑張ってくれている社員には、感謝している。

国民の大半は震災で未だに大勢の人が苦しんでいることを忘れてしまったように感じる。道路、橋でさえも改修されていない所も多くある。また毎日のように、原発の汚染水問題がニュースで報じられている。いつたいどういう事なのか。これからどうなるのか。不安は続いている。私たちには、2年前と何も変わっていないように感じる。國も官僚も、何もしてくれない。

結局は、社員と家族を信じて、自分の力で命をつないでいくより他に道はないのだろうと、改めて強く思つ。

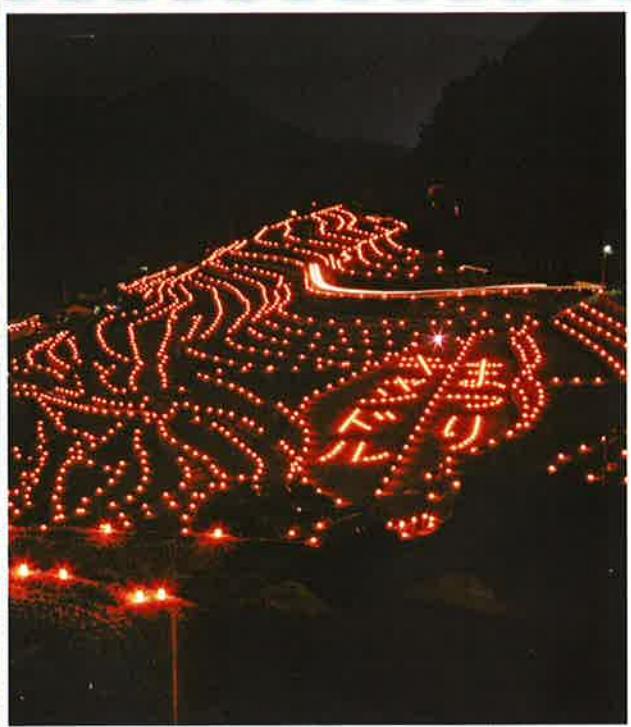
放射線量を検査する。まったく問題なし

1袋ずつ放射線スクリーニング検査をし、安全を保証する福島  
長野県にも新設した精米工場で  
いわきを離れがんばる若手社員  
たちと佐藤さん(右)

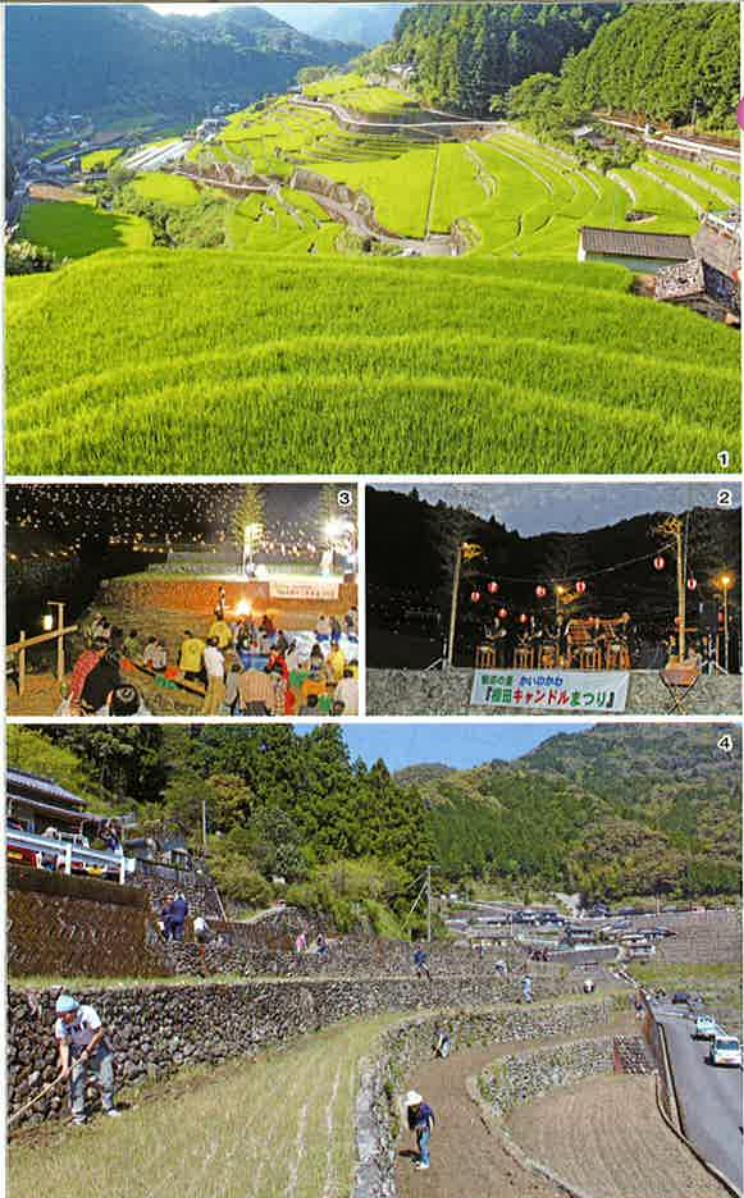
新しく自治体会員が増えました

# 高知県津野町

## 町を代表するイベント「貝ノ川棚田キャンドルまつり」



棚田キャンドルまつりの夜景



1 貝ノ川の棚田 8月1日のようす  
2 棚田キャンドルまつりには2000人以上の人がある  
3 特設ステージでは地元芸能、白石太鼓が披露  
4 棚田オーナーによる田おこし

高知県の中西部に位置する津野町は197.98km<sup>2</sup>、四国山地に抱えられ急峻で、町の約90%を山林が占める典型的な中山間地域。2005年2月、葉山村と東津野村が合併して誕生しました。東部には二ホンカワウソが生息していた清流「新莊川」、中央部には日本最後の清流と言われる「四十川源流点」、標高100m以上の地にある「四國カルスト天狗高原」。その南側には風力発電所の風車20基が山並みに立つ「風の里公園」がある自然豊かな町です。

貝ノ川の棚田は、津野町役場

野町は197.98km<sup>2</sup>、四国山地に抱えられ急峻で、町の約90%を山林が占める典型的な中山間地域。2005年2月、葉山村と東津野村が合併して誕生しました。東部には二ホンカワウソが生息していた清流「新莊川」、中央部には日本最後の清流と言われる「四十川源流点」、標高100m以上の地にある「四國カルスト天狗高原」。その南側には風力発電所の風車20基が山並みに立つ「風の里公園」がある自然豊かな町です。

貝ノ川の棚田は、津野町役場

本庁舎（旧葉山村役場）付近にあり、国道197号から北へ1km余り入った集落の左右両岸に広がっています。

高低差は約80mときつて、400~500年前に開拓された

のではないかと言われています。

高さの平均は1.5m。幅、数m。

長さ、数10mの細長い形の1.5a

程で構成され、筆数は300筆

余り。県下でも屈指の棚田であると自負しています。

2009年8月、過疎高齢化

を憂う有志数人が近隣イベント

を視察後に実行委員会を立ち上げ「貝ノ川棚田キャンドルまつり」が

実行委員会（大崎健夫会長）が

発足しました。

主役であるキャンドルの台は

「20のペットボトルを半分に

切斷し、キヤップの部分を底に

して少量の水を張り安定させて

立てる。「3000本を4m間

隔で畔に配置する。」など一連の

基本作業を決めて行いました。

初年度は、慣れない作業と、

ペットボトルの収集に時間を要

しましたが、年を重ねることに

徐々に改善。今では1日でほとんどの準備を終えるようになりました。

2011年には約280人の小

学生も参加。国道沿いまで拡大させ、40000本となつたキャンペ

ドルが200人以上

の観客

を呼ぶま

でに成長

しました。

翌年には、

実行委員会の

メンバーであり、中

心的役割を果たしている「世話

人会 七人の侍」が「棚田保存会

を立ち上げると同時に「棚田オー

ナー制度」にも着手しました。

この制度は、「静かな集落に賑

わいをもたらす」ことを目的に

復元した耕作放棄地約30aの水

田を1年間希望者に貸し出すも

ので、1a当たり2万5千円の

会費を払えば、田起こし・稲刈

りという一連の作業と収穫の喜

びを味わうことができます。

大崎健夫会長は「キャンドル

まつりもオーナー制度も、65歳

以上が多い集落であるからこそ

できるのであり、けがの功名

と笑う。棚田が狭小で高低差が

大きく、ほ場整備事業が入らな

い（入れられない）地域であるが

故のアイデアが、町を代表す

るイベントへと変貌しています。



四十川源流点

8月27日～28日、今年の全国棚田（千枚田）サミットオープニングで公式テーマソング「棚田へ行こう！」を歌う有田川町立八幡小学校へ行つてきました。同行したのは、私の高校2年生の娘とシンガーアウトキッズの選抜メンバー、日本市立酒谷小学校の女の子（6年2名、4年1名）です。娘はこの曲を作詞やレコーディングにも参加、第12回、第13回のサミットを経験しているのでスタッフとして同行。シングルの選抜メンバー3名は坂元棚田で行われるイベントや地元のお祭りでは「棚田へ行こう！」を元気に歌つてますが、親から離れて県外に行くのも飛行機に乗るのも初めてで、「日南弁でしゃべつたら通じんやろか?」「友だちになれるつちやろか?」「緊張で声が出らんかつたら、振りを忘れたらいかん!」と1か月前からドキドキしていました。

八幡小学校の校長先生が事前に全校児童の集合写真を送つてくださったので私と娘は「シングルアウトキッズ結成当時のメンバーみたいでみんなかわいいね（失礼、男の子はカッコいいね！）」と楽しみにしていました。

そしていよいよ当日！ 鹿児島空港内で飛行機に乗る前にストリートピアノを囲んでミニライブ！ 「棚田へ行こう！」ほか4曲を歌つてから飛行機に乗り込みました。

関西国際空港からは和歌山県と有田川町の事務局の皆さんのお世

話になり、宮崎では見られない都  
会の風景や美しい山並みを見ながら  
有田川町に着くと薄暮に近い時  
間です。まるで美しい「あら  
ぎ島」が待つていました。  
事前に写真などで見ていました  
がちょうど山の影が伸びて言葉で  
は表せない棚田の美しさでした。  
私たちが宿泊した清水町は清流に  
鮎の魚影が光り多くの釣り人が訪  
れていました。シングルの子どもたち  
は初めて浴衣を着て温泉に行き夕  
食も残さず食べて、とても喜んで  
いたので「明日の交流練習を前に  
少し気持ちがほぐれたのだ」とホ  
ッとしました。

そして翌朝、八幡小学校へ。(3)  
約4時間目に交流練習する体育館には児童が描いた「あらぎ島」の絵や夏休みの工作がたくさん展示了ありました。

「なんでも歌詞でいいんだよー」と  
いうやうむちたちの声に楽曲制作担当  
時を思い出しました。そして歌謡曲

指道の歌「君は誰か」が、  
キッズの当時のメンバーで全国から  
のサミットに来のお客さまを歌で  
お迎えください！ 朋田の心優

歌を作りたい！ という気持ちで棚田に行き、体験したことや思いをそれぞれ紙に書いて棚田で暮らす

すメンバーの暮らしを聞き、語を  
作りました。一番の歌詞に出てく  
る『じいちゃんの軽トラのつて  
ばあちゃんのおしゃりまつこね  
よ』は本当の話ですか」とお話しし

八幡小学校の子どもたちは毎朝、

## Topics

# 和歌山県有田川町へ(第19回全国棚田サミット開催地 平成25年11月8、9日開催) 『棚田へ行こう!』の歌唱指導に行ってきました!

シングアウトキッズ代表 鈴木康子(宮崎県日南市)



鈴木康子主宰「シングアウトキッズ」は2004年、「せせらぎの里酒谷まつり」出演をきっかけに結成された児童コーラスグループ。音楽で人の輪を広げようと故郷(宮崎県日南市)の自然や人をテーマにした、オリジナル曲を中心に活動。CD3枚をインディーズでリリース



ステージ上が鈴木さん。歌い踊る日南市のシングアウトキッズのメンバー（ステージ下）と有田川町立八幡小学校のみんな

先生が模造紙に書いた歌詞を見ながら全校児童44名で練習してきました。そこでとても元気な歌声です。今回歌の担当になつた2人の先生が熱心に指導してくださいましたのだと感激しました。

シンガのメンバーも交じつて振付と2部合唱になる部分の練習をしました。「上手に歌うよりも楽しく歌つてね。あたり島の棚田に行つた時のことを思い出してね」と言うと子どもたちの中から「おしゃぎり美味しい」など声が聞こえてきました。時間を迫つゝとにかく力を発揮させて歌う子どもたち。

あつという間に4時間目のおわ

る地域の方々にお会いして有田川町で行われる棚田サミットはきっと素晴らしいものになるでしょう」と思いました。

日南の小さなコーラスグループが生み出した「棚田へ行こう!」。同行した娘から「いつかお母さんが死んでもこの曲は歌いつがれていくから(いい曲作つて)よかったです」と言われ思い出しましたが、日本で行われた第12回棚田サミットのテーマは「棚田・未来への継承・人の絆が棚田を創る」でした。

歌声だけでなく、このテーマのもと曲を制作した初代メンバーやたちの「ふるさとの棚田を守りたい!」という気持ちも開催地の子どもたちに受け継がれて行くことでしょう。最後に今回の有田川町訪問でお世話になつたたくさんの方さまに心より感謝いたします。ありがとうございました。

「棚田へ行こう！」等の楽曲についてのお問い合わせは mail : yasukosing@gmail.com  
Tel : 080-1706-2017(鈴木康子) / Fax : 0987-25-9324



『姉捨の棚田ガイドブック』

文明の災禍

保全情報までまるごと紹介した1冊である。中でも「田毎の月のイメージを定着させたといわれる歌川広重「信濃更科田毎鏡台山」も取り上げられており、時代の中における娘捨棚田の存在の変遷も味わうことができる。A5版オールカラー95ページ。

『ゼロから理解する水の基本』

千賀裕太郎監修  
誠文堂新光社刊  
2013年7月(定価1600円+税)

身近な水について、わたしたちはどれだけのことを知っているのであるだろうか。監修者の千賀裕太郎氏は本書の「はじめに」でまさにこう書いている。「水は絶対に欠かせないものです。とにかくわざと、最も身近な存在である『水』のことを、私たちにはほとんど知らない、といつてもよいでしょう」と。世界の水資源情報にはじまり、脱水症など健康、節水など家庭内の水、そして森・川・海の循環や農業における水まで、水に関して考えられるありとあらゆる側面から水が語られる。さまざまな水への疑問に答え、水の最新情報を提供してくれる一冊だ。

『ゼロから理解する水の基本』

「コミュニケーションの再創造」である。「國土」「ローカル」「コミュニケーション」「集合」……数々のキーワードを手がかりに誰もが、内山氏の深い実感とともに未来を、過去を、もちろん今をもつかみ直すことができるだろう。

人々が感じたその感覚に、まるで答えるかのように内山節氏は言葉を紡ぐ。人の本質は関係の中における二三のう、復興における

都府滋賀県及び福井県に発令されました。土砂崩れや河川の氾濫など甚大なる災害が起り、行方不明者も出るといつ、大惨事となってしまいました。

私が住む山都町では、幸いにも近年大きな豪雨災害は起つ

され、重大な災害の危険性が著しく高まっている場合、新たに「特別警報」を発表し、最大限の警戒を呼びかけることとなりました。

気象庁は、平成25年8月30日から「特別警報」の運用を開始しました。気象庁はこれまで、大雨・地震・津波・高潮などにより重大な災害の起つるおそれがあるときに、警報を発表して警戒を呼びかけていました。これに加えて今後は、この警報発表基準をはるかに超える豪雨や大津波が予想される場合に備えて、より早くより多くの方々に警報を発表する方針を立てました。

近年の異常気象とも思える、豪雨災害が多く発生しています。本年7月から9月にかけての記録的な大雨、台風18号では日本各地で大変な被害をもたらしました。本会員の京都府福知山市では想像を絶する被害であり、皆さまの安全と一日も早い復興を願うとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

ていませんが、平成24年7月の九州北部豪雨では、近隣の阿蘇市が大きな被害を受け、残念ながら死者も出るという悲しい出来事がありました。雄大な阿蘇の田園風景が一変し、豪雨によつて残した爪痕は痛々しくもあり、自然災害の恐ろしさを改めて感じました。

菅地域は「高齢化率40%を超える典型的な中山間地の農村地域であり、集落内の人と人との繋がりが深い地域です。「自分たちの地域は自分たちで守ろう」という堅い絆が菅地域の美しい棚田景観、自分や周りの人の安全それから地域全体の安全を守り、菅地域の農村「ミニユーティ」を形成しているのではないかと思っています。

しいいただきました。その中の菅棚田を保存している菅地域振興会では、平成4年に自主防災組織を立ち上げ、危険箇所の点検や農業用水路等の施設の点検、そして災害時の避難場所の確認などを定期的に行い、災害防止と自主防災意識の向上に努めています。「自分たちの地域は自分たちで守ろう」という合言葉で活動を行い、平成8年には熊本県優良自主防災組織知事表彰を

# 編集後記

# 会員募集中

## 新しく会員になったみなさま

長野県小谷村  
笠松和市(徳島県)

# 棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織 全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

熊本県山都町 農林振興課内

元861—3663 熊本県上益城郡山都町新小886

TEL:0967-721136

FAX: 0967-721066

協議会 HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

# 四谷の千枚田を潤す水で、愛知県第1号の小水力発電!

2013年6月1日、愛知県新城市四谷の千枚田では、今年で8回目となる「お田植え感謝の夕べ～灯そう 千枚田～」を連谷お助け隊\*主催で行った。1500本のロウソクを千枚田の作業道に並べ、そこに火を灯す催しだが、今年はひと味違った。

四谷の千枚田の展望台である、ふれあい広場に設置された愛知県第1号の「小水力発電装置」の完成式が同時に行われたのだ。県は、四谷の千枚田がCOP10の里山や田園自然再生コンクール大臣賞受賞をはじめ、環境を重視し貢献してきたことを踏まえ、第1号導入を決めてくれた(中山間ふるさと・水と土保全対策事業)。新城市も環境を重視しており、小水力発電を推し進めている。そして、連谷地区みんなが協力しての導入だった。

完成式には、大村知事をはじめ穂積市長も参列。祝辞のあと、この発電機による電気でイルミネーションの「千枚田」の文字が浮かび上がった。そして、小水力発電の愛称が披露された。その名も「でんでんちゃん」。地元・連谷小学校の児童5名が、感性とアイデアで小水力発電に命名したものだ。

知事の挨拶にもあったが、「でんでんちゃん」は鞍掛山の湧水を利用し、棚田を潤す農業用水を利用しての小水力発電は全国的に珍しいもの。知名度の高い「四谷の千枚田」だけに、再生可能エネルギー利用促進の先導的な事例として広く小水力発電の普及にも貢献すると期待されている。「でんでんちゃん」の概要は次のとおり。

- ・発電方式：永久磁石式発電機
- ・水車方式：クロスフロー水車
- ・最大発電量：1kw
- ・落差：約11m
- ・流量：約10L／秒(変動あり)

作られた電気は、ふれあい広場にあるトイレの照明や浄化槽のブロアの電源として利用。また、獣害防止用の電柵の電源としての利用も検討中だ。発電用水車を経由した水は、通常どおり千枚田を潤す。

現在、四谷の千枚田は賑やかだ。注目度が高く、視察の対応に追われている。訪れた人は小水力発電だけでなく、山裾一帯に開かれた棚田の風景を見て驚嘆し、それを守り抜く姿勢に「敬意の念を抱く」と絶賛していく。千枚田の環境保全活動がまた一つ実を結んだといえる。

(鞍掛山麓千枚田保存会会長 小山舜二)



四谷の千枚田に設置された小水力発電施設「でんでんちゃん」



「でんでんちゃん」による発電で「千枚田」を灯す



上：「お田植え感謝の夕べ～灯そう 千枚田～」の光景  
右：四谷の千枚田は鞍掛山の麓に7.4ha拓かれている



「でんでんちゃん」を命名した連谷小学校児童5名と知事と

